

Q：他の国では、スマートグリッドの開発は進んでいるんですか？
国によってその背景の違いとかありますか？。

■アメリカ

アメリカのDOE（エネルギー省）によるスマートグリッドの定義は次のようなものです。「デジタル技術を活用して、信頼度・安全性・効率を向上させた、大規模電源、送配電ネットワークから顧客に至る設備、増加しつつある分散型電源・電力貯蔵設備からなる電力系統」

アメリカではひとつひとつの電力会社の規模が比較的小さく地域ごとに孤立していて、送電網にまとまった投資がなされてこなかったという背景があります。そのため、2003年の北米大停電などが起こったとされています。もちろん、電力を始めアメリカ人のエネルギー消費は、世界水準から言って桁違いに大きく、まず徹底した省エネがもとめられることは言うまでもありません。それには、アメリカ人のライフスタイル全般に対する見直しが必要ですから、そう簡単にはいきません。広大な国土で、巨大電力を必要とする全国的な電力供給不安を解消するためには、電力供給側や送電網に投資するよりも、需要側の改変で乗り切ろうというという意向が働いています。そのためのスマートグリッド開発なのです。



この DOE の解説図を見ても、電力多消費レベルを維持しつつ、小口の消費

者＝家庭部門を変革していこうという力の入れ方が伝わってきます。そしてそれは、あらたな家庭電化製品市場の開拓として狙われているのです。当面、スマートグリッドにかかわる諸設備規格の「標準化」が標的になっています。アメリカ製品の規格がスマートグリッドの世界標準になればそれだけで世界市場で利益を上げることが出来るのです。

しかし、こうした先端技術の開発もさることながら、アメリカ人のエネルギー消費をまず減らす取り組みが必要でしょう。

こんな話もありました。2003年の大停電以後、アメリカの中流家庭以上の人が始めたのは、留守にするときに家のエアコンのスイッチを切ることだそうです。アメリカではエアコンは24時間つけっぱなしの家庭が多かったとか。留守時にエアコンを切ることさえ、アメリカ人にとっては「新しい取り組み」になるそうです。

さらに、サクラメント市などで行われてきたデマンドサイドマネジメントの取り組みなども、もっと広める必要があるでしょう。

例えば、照明器具は白熱電球を無償で（あるいは安い負担で：電力会社が負担して）蛍光灯に換えることが進められましたが、今ではLED照明に交換するともっといいでしょう。

家の南側に大きな落葉樹を植える取り組みもあったそうです。夏は生い茂る葉で日陰になって、冷房が不要となり、冬は落葉して日差しが確保され暖房の助けとなります。

また新しい電力消費の少ない冷蔵庫に買い換えるときに、電力会社から補助金が出るしくみもありました。電力会社にしてみれば、このようにして節電した電力を新しい顧客の開拓に向けることが出来るというのです。「発電所」ならぬ、「節電所」の発想です。

このようにアメリカのようなエネルギー多消費社会では、足し算の改革より前に、引き算の変革を強く進めるべきだと思いませんか？